

花王教員フェローシップ「太平洋北西部のサケ」体験報告書

■ 報告者：秋田 貢（愛知県名古屋市長明正小学校教諭）

□ 調査日：2004年7月31日～8月6日



バシャーン！突然、ラルフが川の深みにはまった。全身ずぶぬれ、ポケットの中のデジカメも携帯電話も水没してしまった。それを見ていた私たちは大笑い。もちろん彼もぼつが悪そうに苦笑い。ラルフというのは、今回のプロジェクトをリードした研究者ラルフ・ライリー博士である。こんな彼の明るく楽しい人柄が、ただでさえすばらしい自然

環境の中でのこの体験を、最高にすばらしいものにしてくれた。まずはラルフに感謝したい。

環境教育として、私たち教師がしなくてはいけないこと、それは、「私たちをとりまく環境の問題に気づき、その問題に対して、何らかの行動を起こすことができる人を育てること」である。今、教壇に立っている教師の多くが、「子供の時、ほとんど自然の中で遊ばなかったなあ」と、私に話す。自然体験活動のない教師が、自然環境の大切さを、どうして子供たちに伝えることができるだろうか。子供だけに環境教育を押し付けるのではなく、教師を含めた大人にも行動してもらわなければいけないと考える。こんな思いを胸に、私はアメリカへと飛び立った。

ワシントン州・スカジット川流域でのプロジェクト。前半は、上流域（原生林）にて活動した。

「太平洋北西部におけるサケの数を増やすためには、その産卵や養育のための生息地を回復させることが大切である。そのため、まず、生息地において、数多くのデータを集めることが重要である。森の調査することで、森と川の間関係をより深く理解することができ、複合的に、健全な生息地と不健全な生息地を分析し解明することができる」と、ラルフが説明した。レンジャーの宿舎を出発し、車で1時間ほど走った所に調査地があった。ウェーディング・ブーツに履き替え、森の中へ。ラルフは、少し腐敗した落ち葉を手にとり、窒素固定の話 시작했다。

ここ原生林での調査は、植物の分布、樹木の高さや直径・年齢、川の傾斜度や地形、川底の小石の大きさ、木の堆積物の量といったデータの収集であった。この結果は、川のシステムとサケの生息地の関係が、どのように周囲の地形の様子によってつけられているかを教えてくれる。特に、どれくらい良好な自然の森が、どれくらいたくさんの木の堆積物を川に与えるかを見積もることに役立つ。私たち8人のボランティアは、自らの希望で作業を選び、交代しながら調査を進めていった。原生林の中では、デビルズ・クラブ（アメリカハリブキ）のとげに注意を払いながら、もくもくと仕事をしたが、何百年も生きている

巨大なウエスタン・ヘムロック（アメリカツガ）やパシフィック・シルバー・ファー（モミ属に近縁）の森に、いつのまにか体は癒され、木陰で飲む水のおいしかったことは忘れられない。

後半は、下流域（生息地回復計画中の農業地帯）にて活動した。

「これまで下流域では、たくさんの木の堆積物を取り除かれている。そのことは、サケの生息地に打撃を与えている。これらの堆積物は川の流れを不均質にして、生息地を増やすことに役立っている。いろいろな状態の水のたまり場や早瀬は、サケにとって、産卵や休憩、そして隠れるための場所となる」との説明。そこで私たちは、生息地回復計画中の土地にて、一般ボランティアによって植えられた樹木を含めた植物の分布状態、川の傾斜度や地形、木の堆積物を調査し、現時点でのデータを集め、今の状態が適当であるかどうかを検討した。植えられた木はまだ小さく、林にもなっていない状態であったが、川にはサケの幼魚が数多く泳いでいたのには驚いた。また、以前流されてきた流木が再び流されることのないように、アンカーリングされているのにも驚いた。



ボランティアの半数（4名）は、アメリカ東海岸側からの参加であった。アトランティック・サーモン（タイセイヨウサケ）が帰ってくる川の調査を3年生の児童とともにしている先生もいた。学校が始まったら、今回の経験を、比較検討するということであった。

私の学校でも、子供たちが学区に流れる川の生態を調べている。その川は生活排水が流れ込む汚い川であるが、生き物はいる。この川と今回調査した川を、比較検討することを、今後の授業内容としていきたい。そして、タイセイヨウサケの川を調査している学校の子供たちとも交流をすることを、その先生と約束した。これらの実践から、自然環境を守ることの大切さ、そして、自然界のつながりの重要性を、体験を通して、子供たちに考えさせていきたい。